

保育者と子どもの関係構築プロセスの変容と要因 (4)

——中堅後期の保育者に着目して——

上 村 晶

A Study on the Changes and Factors of the Process of Building the Childcare Teachers-Child Relationship (4)

—Focusing on Late Mainstay Childcare Teachers—

Aki UEMURA

I. 問題と目的

保育現場における保育者と子どもの関係構築は、保育を実践していく上で不可欠であると考えられている。筆者はこれまで、保育者と子どもの相互主体的関係（鯨岡，2011⁽¹⁾）に依拠しつつ、初任期（1年目）・若手期（2-5年目）・中堅前期（6-10年目）の保育者と2歳児の子どもの1年間に及ぶ関係構築プロセスに着目し、わかり合おうとする関係を構築していく上での転機や変容の要因を明らかにすることを試みてきた（上村，2019a⁽²⁾・2020a⁽³⁾・2020b⁽⁴⁾）。これまでの研究結果を概観すると、保育者のキャリア発達に応じて、①初任・若手期には、保育者を取り巻く人的環境の変化が関係構築を阻害・促進する外的要因として影響しやすいものの、中堅前期になると外的環境の変化に大きく揺さぶられることなく、保育者と本児の二者関係性の狭間に焦点化しながら関係を構築しつつあること、②初任・若手期は、専門職及び一個人としての自信のなさや、子どもの姿に対する保育者の受け止め方の差異、集団の中で個別具体的な関係を構築する難しさなど、保育者自身の子どもへの見方・考え方によって葛藤が生じやすい傾向があるが、中堅前期になると、徐々に本児側の立場に立って本児の心情を感じ取りながら関係構築を図るようになりつつあること、③関係構築の促進に着目すると、若手期では、困惑状況下において丁寧な省察や子どもへのわからなさに由来する尊重志向性が起因となる一方、中堅前期では、本児の主体性を尊重しながら見守るという保育行為が関係構築の促進につながること、④若手期以降では、可視的状況と非可視的状況を包括的に捉えて今の関係性を判断するようになりつつあること、などの特徴が見出されている。したがって、保育者のキャリア発達に伴い、徐々に迷走したり五里霧中になったりすることが少なくなると同時に、保育者自身の見とりと信念に基づき、子どもの自律的な成長を願いながら関わることで、わかり合おうとする関係を構築しようとしていると考えられる。

以上の見解を踏まえ、本稿では、保育経験11年目から15年目の中堅後期の保育者と2歳児

の子どもの関係構築プロセスに焦点を当てて調査を実施した。特に、保育経験11年目以降の中堅後期の保育者における子ども理解の特徴に着目すると、特定の場面や状況を選んで多様な場面の子どもの状態を複数の視点から文脈的に捉えることができるようになる(高濱, 2001⁽⁵⁾)、子ども一人一人に対して余裕をもって長い目で発達を考えることができる(志賀, 2001⁽⁶⁾)、目の前の幼児の姿によって背景に着目する場合や内面的理解に着目する場合など、柔軟に視点を転換することができる(佐藤ら, 2017⁽⁷⁾)などの知見が見出されている。また、子どもの表面に現れた行動だけでなくその行動が持つ意味に気づくなど、保育者や保育環境など気づきの範囲が多様に広がるという知見(吉田ら, 2015⁽⁸⁾)や、保育経験10年未満の保育者に比べて10年以上20年未満の保育者の方が、保育の中で子どもの変化を察する頻度が高いという見解(杉村ら, 2007⁽⁹⁾)も存在している。このように、10年という保育経験を1つの節目とした子ども理解の深化や視点や気づきの多様化が指摘されていることから、これらは子どもとの関係を構築していく上でも大きく影響している可能性があると考えられる。また、保育経験10年を超えた場合、保育者のキャリアステージにおける職位や担当の異動だけでなく、個人のライフステージにおける結婚・出産・転職などを経験する保育者も少なくないと考えられ、多様な働き方や経験を蓄積する中で、子どもとの関係構築の在り様も深みを持ちたり変化したりする可能性があると考えられる。

その一方で、これらの保育経験の蓄積が、子どもへのまなざしを硬直化させる可能性も報告されている。長年の保育経験によって身につけていく園文化や保育姿勢などが、時に子どもに対するスタンスの柔軟性を奪ったり、無意識のうちに新たな発想や子どもの自発的な活動に目が向かなくなったりすることを通して、保育者が一方向的に活動を押し付けてしまうことや、かつて抱いていた新鮮な気持ちを失ってマンネリ化に陥ってしまうことなどが指摘されている(三谷, 2007⁽¹⁰⁾)。したがって、ただ単に保育経験を蓄積させるだけでなく、保育者がどのような経験・研鑽を積みながら、目の前の子どもと対峙する中でわかり合おうとする意識を持ち続けていくかも、関係を構築していく上で非常に重要であると言える。

これらの知見を踏まえた上で、本研究では、中堅後期の保育者が子どもとわかり合おうとする関係構築プロセスを明らかにすると同時に、転機や葛藤の要因を解明することを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査協力者の概要

調査協力者は、A法人(私立)のB幼保連携型認定こども園に勤務するユリカ保育者(保育経験11年目, 女性)と2歳女兒カナコ(12月生まれ)と、C幼保連携型認定こども園に勤務するヨリコ保育者(保育経験12年目, 女性)と2歳男児ツヨシ(2月生まれ)である。2名の保育者とも転職歴があり、ユリカ保育者は、他の私立保育園に2年勤務した上で、産休・育休を経て、A法人に勤務して9年目であり、またヨリコ保育者も、他の公私立保育園で保育職を8年経験した上で、A法人に転職して4年目であった。2名の保育者は、下記の理由により、

カナコとツヨシを視point児として選定した (表1)。

表1 視point児の概況と選定理由

保育者	ユリカ保育者 (11年目)	ヨリコ保育者 (12年目)
視point児	カナコ (12月生まれ)	ツヨシ (2月生まれ)
担当状況	4-6月は12年目のサキエ保育者と担当 7月以降は2年目のキクヨ保育者と担当	1年を通じて、1年目のミチル保育者と担当
視point児の概況	父・母・本児の3人家族。 B園に生後1歳11か月時点で入園。	父・母・本児の3人家族。 同法人小規模保育所に生後1歳2か月時点で入園し、調査開始当初にC園へ転園。
視point児の選定理由	他児を思いやる姿が見られる反面、保育者と一緒に遊びたい・甘えたいなどの姿も見られたため、様々な感情を園で表出し、安心して園生活を送り、自立へとつながるような信頼関係を築きたいと考え、選定した。	慣れない人や場所に不安を感じて表現しようとしませんが、内に秘めた意欲や様々なことへの興味があると感じられるため、安心して自分の想いを伝え、共に寄り添い合える関係を築きたいと考え、選定した。

2. 調査方法

2018年4月から2019年4月まで、月1回の頻度で保育観察と園内の相談室で半構造化インタビュー (ユリカ保育者: 計495分、ヨリコ保育者: 計281分) を実施し、①先月の視point児の大きな変化、②保育者と視point児の関係を特徴づける事例、③省察、④次なる手立て、を尋ねると同時に、その時点における保育者と視point児の二者関係性の可視化を依頼した。また、年度終了後に、1年に及ぶ保育者と視point児の関係性における大きな転機と期の大別を尋ねると共に、1年を通じた関係性の可視化を依頼した。

3. 分析方法

分析には、テーマ分析 (伊賀, 2009⁽¹¹⁾) と複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: TEM、サトウら, 2015⁽¹²⁾) を採用し、二者間の関係構築プロセスに関しては、時間軸に沿って両者の関係性の変容を同時並行的に描く Parallel-TEM (上村, 2018⁽¹³⁾) で分析した。具体的な手続きは、①各回の逐語録より、保育者が視point児とわかり合おうとする関係を構成する特徴的な語りから意味単位 (パターン) を識別する、②各意味単位から概要 (意味単位の要約や言い換え) を抽出する、③各概要を比較しながら、両者の関係性の特徴や背景要因などに関するテーマ (各概要の類似的まとまりに着目して抽象度を高めたもの) を抽出する、④TEMの理論枠組みに基づき、テーマを「必須通過点 (Obligatory Passage Point: OPP、両者の関係性の質的变化)」、「分岐点 (Bifurcation Point: BFP、保育者の行為や関係の捉え方の変容)」、「社会的方向づけ (Social Direction: SD、わかり合おうとする関係への歩みを抑制する保育者の意識や両者を取り巻く環境)」、「社会的助勢 (Social Guidance: SG、わかり合おうとする関係への歩みを促進する保育者の意識や両者を取り巻く環境)」に分類して、時系列に沿って配置し、二者関係性を加筆した Parallel-TEM図を毎月作成する、⑤翌月TEM図を示し、両者の現時点の関係性を調査協力者と共に検証・修正する、という流れで実施した。特に、各月の関係変容

の機微を調査協力者とその都度確かめるよう配慮しながら、①～⑤の手順を1年間で12回繰り返し、テーマを抽出した(表2)。

その後、1年分が蓄積された Parallel-TEM 図を年度終了後に調査協力者と再度振り返り、互いにわかり合おうとする関係の構築を「等至点 (Equifinality Point: EFP)」に設定した上で、1年を通じて視点児との関係が最も大きく変容した転機、関係構築を抑制・助勢した主要な要因を尋ね、マスターテーマ(テーマの抽象度を高め、特に1年間の両者の関係構築を特徴づけたテーマ)を抽出した(ユリカ保育者:計51個、ヨリコ保育者:計49個)。これらを整理しながら1年版の Parallel-TEM 図を作成した上で、1年を通じた二者関係性の大局的な推移を再度曲線で描いた。なお、本研究全体を通じて、本研究の信頼性・妥当性を担保するために、分析の中で研究者側の視点に偏った分析にならないよう配慮しながら、調査協力者と協働的に TEM 図を作成・修正するよう留意した。

表2 調査協力者の各月のインタビュー時間と抽出テーマ数

月	ユリカ保育者の時間とテーマ数		ヨリコ保育者の時間とテーマ数	
4月	30分	23	34分	24
5月	22分	21	19分	23
6月	28分	23	20分	23
7月	34分	31	22分	33
8月	26分	32	19分	29
9月	35分	35	21分	27
10月	38分	23	26分	31
11月	25分	31	23分	34
12月	55分	31	21分	33
1月	55分	33	19分	24
2月	85分	33	31分	28
3月	63分	24	26分	28
計	495分	340	281分	337

4. 倫理的配慮

日本保育学会倫理綱領に則り、調査協力園の園長・保育者・視点児の保護者へ、口頭と文書で調査趣旨を説明し、個人情報保護を遵守して実施することを伝えた上で、研究協力の承諾を得た。また、本研究における調査協力者及び園名は全て仮名で取扱い、人権に配慮した。なお、本学における研究倫理審査を受審し、実施許可を得た。

III. 研究結果

2名の中堅後期の保育者の Parallel-TEM 図(図1・図2)では、新年度開始を起点とし、互いにわかり合おうとする関係の構築を『等至点: EFP』に設定した上で、両者が関係を構築していく上での〈必須通過点: OPP〉、1年を通じて両者の関係の大きな転機となった〔分岐点:

BFP)、視点児とわかり合おうとする関係構築を促進した【社会的助勢：SG】と、抑制した《社会的方向づけ：SD》に分類しながら、モデル化した。

以下、2名の保育者の各期の事例と語りの概要を示す。なお、調査協力園の“共生共歩”の理念に基づき、園内でユリカ・ヨリコ保育者は“ユリちゃん・ヨリちゃん”と呼ばれているため（他保育者も同様）、本稿では現実的な文脈を反映して、そのまま記載した。

1. ユリカ保育者がカナコとわかり合おうとする関係構築プロセス

語りの質的变化から、ユリカ保育者がカナコとわかり合おうとする関係構築プロセスは、全4期に大別された（図1）。

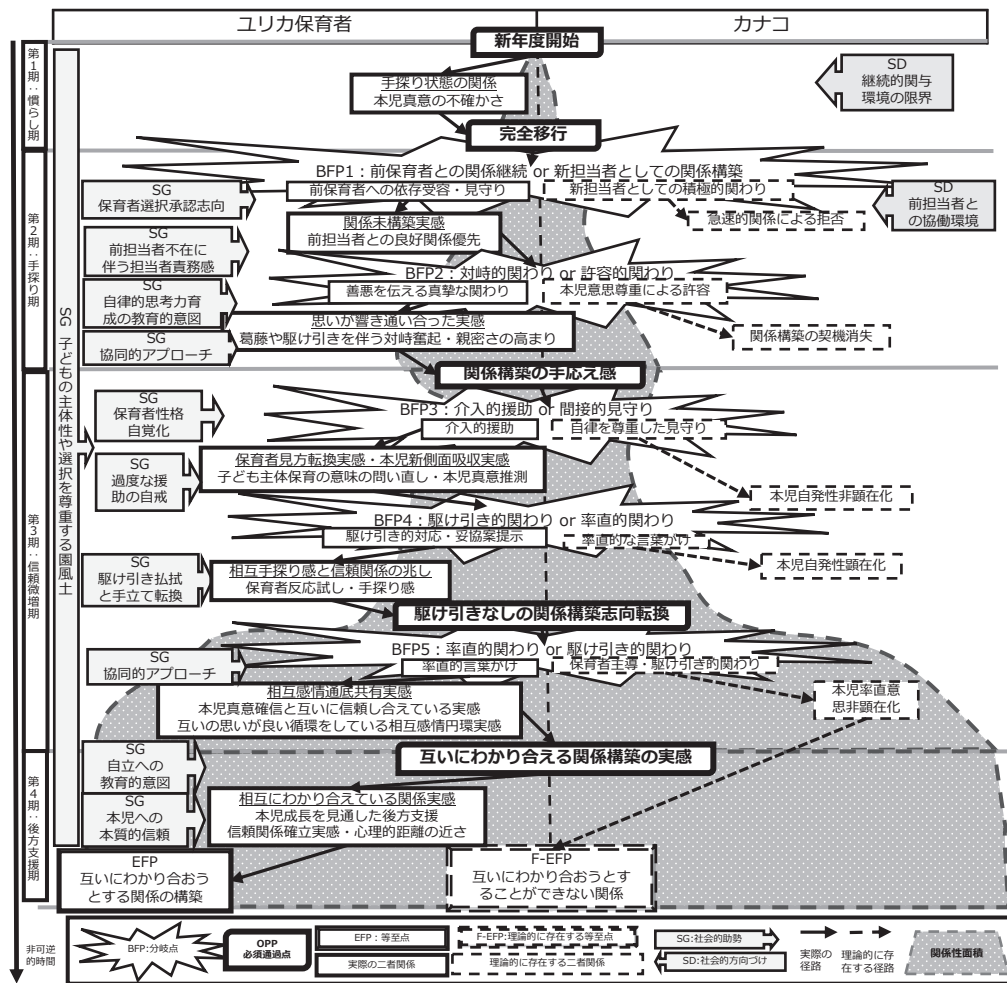


図1 ユリカ保育者とカナコの関係構築プロセスにおける Parallel-TEM 図

1) 第I期：慣らし期 (4-5月)

【事例1 「何しているの？」 (4/26)】

園庭で遊んでいた時、「何しているの?」とカナコが声をかけてくる。草取りと虫探しをしていると伝えると、一緒にしゃがみ込み私の様子を見て、その後草取りをし始め、取った草を笑顔で差し出す。

【4月期の語り（一部抜粋）】

なんか子どもよりも大人との関わりを求めることが多いから、①一緒にやってみようかなっていう風に思ってくれたかなって感じで、まだちょっと推測ですが。(略) この時はまだダメだろうと思っていたら意外って感じで、印象からのギャップが大きかった。(略) ②結構まだぶつ切りの時間が多いから、流れていけるように配分をしながら、徐々に新しい場所や大人に慣れていけるようにしたいですね。

第Ⅰ期の4-5月は、6月以降の移行を控えた慣らし保育の時期であり、ユリカ保育者はカナコと週2～3回関わる《②継続的関与環境の限界》という状況下で保育を行っていた。以前より長時間保育などでカナコと関わりがあったため、全く知らない間柄でもなかったが、引継ぎ時の情報から環境変化への敏感さや人見知りを感じつつ、前担当者のサキエ保育者へなびく様子も見られ、本児真意の不確かさに基づく〈①手探り関係〉が続いていた。そのような状況下で、本児が自らユリカ保育者へ声をかけ、一緒に草を取り差し出す様子に驚くと同時に、6月期の移行を見通した支援を考えるようになる。

2) 第Ⅱ期：手探り期（6-8月）

【事例2：よかった（6/21）】

おむつ替え場面で、前担当者へおむつをもって走り寄り「やって!」と言う。他保育者におむつを履き替えさせてもらい、再び戻ってキュロットを自分で履く。「他保育者にやってもらって良かったね」と言う笑顔で応じる。

【6月期の語り（一部抜粋）】

でも、①カナちゃんに頼れる大人がいるって、良かったなって。去年の担当のサキエちゃんっていう信頼ができる大人がいて2階に上がってきているから、そこで頼れる大人がいてよかったなって純粹に。(略) ②昔、乳児をやっていた時は、まだ年数も若かったし、そこまで私も受け入れられなかったんだけど、それこそ幼児で大人が4・5人いる、その中で担当が決まっていないから誰か話せる人・信頼できる人に相談できることって、すごいなって。またちょっと乳児と幼児だと違うけど、幼児はそういうのが大きく出てくるから、そこからかな…、そういう風に考えるようになったのは。(略) ③私が無理やりやっちゃったとしても、そこでの関係がまた壊れちゃうから、だったらやってもらいたい人にやってもらって次を待つっていうか、もうちょっとやってもらった方がいいのかなあって感じです。

【事例3：自分のことは自分で（7/17）】

朝のおやつ後に隣の部屋で音楽が鳴り、カナコはコップを片付けずに走り出す。その際、

コップが残っていることを伝えると、一瞬振り返るがそのまま行ってしまう。歌が1曲終わったタイミングで再び向き合って片付けを促すと、しばらく無言だったがじっと私の顔を見る。その後片付けて、笑顔で戻ってくる。

【7月期の語り（一部抜粋）】

この時、④あえて向き合ったことで、彼女に響いたってというのがあったかなと思って。大人も今まで「あ、片づけておくれ」っていう感じでやっていたんですけど、⑤自分でやることの大切さや意味みたいなのも伝えたいなっていうのもあって、ちょっとこっちは真剣に。そうになったら、私の表情や雰囲気を見て、「おっと、これはいつもと違うぞ！」みたいな表情をしたから、こちらもそれ以上何も言わず待っていたみたいな感じで。(略) ⑥真剣に向き合うか向き合わないか…。今の時期、移行して1か月半だし、真剣にちょっと強く言うか言わないか…。でも、このままいいよいいよでいくと、多分、私の声はもう入らなくなるかなっていうちょっと怖さもある。一度待たしたし、葛藤もあったけどワンクッションあったし、いけるかなっていう、駆け引きがちょっとありましたね。

第Ⅱ期には、6月の完全移行から一緒に生活することが増え、初めて「ユリちゃん」と名前を呼んで関わるカナコの姿も見られるようになった。物理的距離が近くなる一方で、昨年度の前担当者のサキエ保育者と共に保育をする《前保育者との協働環境》の影響を受け、カナコがサキエ保育者へ関わりを求めることも多かった。しかし、ユリカ保育者は新担当者として関係を築こうと焦ることなく、カナコ自身がどの保育者を選ぶかを承認する【①③保育者選択承認志向】に助勢されながら見守り、前担当者との良好関係を優先していた。この背景には、以前幼児の保育を担当した経験から得た【②子どもの主体性や選択を尊重する園風土】により、カナコ自身の選択を尊重しようとする信念が潜在していた。

7月に入ると、サキエ保育者の他グループ異動に伴う【前担当者不在に伴う担当者責務感】や【⑤自律的思考力育成の教育的意図】に助勢され、カナコと真摯に向き合う対峙的な関わりを展開したことで〈④思いが響き通った実感〉を初めて抱く。この際、許容し続けると保育者の言葉が届かなくなるという予測から〈葛藤や駆け引きを伴う対峙奮起〉も見られたが、あえて真剣に向き合う関わりを選択したところ、徐々にカナコからの関わりが増えていった。また、8月には、保護者からの情報提供に基づき、ユリカ保育者がカナコと一緒に取り組むような【協同的アプローチ】を展開していく中で、親密さの高まりや関係構築の手応えを感じるようになった。

3) 第Ⅲ期：信頼微増期 (9-12月)

【事例4：できる！（9/10）】

普段着替えの際に「やって」と持ってくるが多かったため、この日も着替えの援助をしようと「ここを持ってやろうね」と言ったところ、「できる！」と肌シャツを奪い取る。「ここでカナちゃんが頑張るの、見てるね」と伝えると「見ててね」と伝え、そのまま上着・ズ

ボンも全部自分で着替える。

【9月期の語り（一部抜粋）】

本当に、①自分がせっかちな性格なのはわかっているし、でも待てないからこそ「待とう」「ちょっとワntenポ置こうかな」っていう。②そこで先走っちゃうと、答えを出しちゃっているんだよね、本当何かそれって子ども主体なのかな？って思うし。なんか、③もともと2年違う園でやっていて、そこはもう本当に巻いて巻いての園で、「何時までに寝かせて」「何時までに起こして」みたいな園だったから。その頃だったらきっと「口を出しすぎないで待とう」なんていう発想はなかったから、この園の考え方もすごく大きくて。(略)だから、④この「できる」で気付かされた自分がいて、「口出しすぎた、手出しすぎた…」って。今回はわかり合えたというか、わからされたというか、私が…。なんか、⑤「もうちょっと私のこと信じて見ていて」「ユリちゃんいなくてもやれるから」って言われた感、気づかされた感がある…。でも⑥手探りではないし、一方通行感があるわけでもないし…、お互いに伝わり合ったから「この人になら伝わるだろう」にもう一步進んでいる感じで、それだけ近づいてはいるんだよな…。私も「もうちょっと任せてみればよかったのに」っていうところに気づかされたけど。⑦私に見ていてもらいたいっていう奥の気持ちも伝わってきて。

【事例5：まだ帰りたくない（10/29）】

園庭で遊んでいた際、昼食を食べる支度ができたがどうするか問うと「まだ行かない」とカナコが呟く。年少児と他保育者も園庭にいたため、一度ユリカ保育者は他児と部屋に戻った後、再び呼びに来るが、遊んでいたため園庭の入り口で待っていることを伝える。他児全員が部屋に帰って最後の一人になったことに気づくと、「ユリちゃん！」と一目散に駆け寄ってくる。

【10月期の語り（一部抜粋）】

拗ね拗ねモードで、⑧私からの「一緒に行こう」を待っていたかもしれない、この人にどこまで自分を受け止めてもらえるかな…とか試しながら。だから、ここでどこまで受け止めてあげられるのか、私たちの技量も試される時期なのかな…。(略)今回は、⑨探りを入れている感じがあったし、ちょっと私的に読みきれなかった部分が。ここで話をしている、あの時「一緒に行こう」と言ったら変わっていただろうな…とか、遊びたかったんじゃないのかな、聞き出しが甘かったのかなと。もう少し時間をかけて会話を掘り下げていたら、もっと何か違う選択になったのかな？というのはあって…。そう考えると、⑩やはりこっちも探っているし、こっちも履き違えたというか、かみ合わなかったというかがあるから。手探り状態で、探っている感は5月と似ているのかなと思うけど、5月にはなかった信頼感というものはついてきているかな…。

【事例6：やっぱり一緒がイイ！（11/19）】

公園での園外保育から帰る際、まだ遊びたい？と尋ねると、「うん」と答える。他児が待つ

ていることを伝えると、手をつなぎたくないと言っていると首を振る。「じゃあ、ユリちゃんとだったら一緒に帰る？」と手を差し伸べると、少し黙って考えた後に、何も言わずそっと手をつないでくる。

【11月期の語り（一部抜粋）】

私の中では、最後の手を差し出した時に、間が空いたところ、ちょっと葛藤している感じが一番印象に残ったかな…。(略) あ、でも、なんか⑩「待っていてくれるだろうな、ユリちゃん」って思っている。その信頼を寄せられているっていう実感はやっぱりありますね。彼女からすると「自分を受け止めてもらえる」は感じているだろうって。(略) 前回の反省を生かして、そういう駆け引きなしで関わったことで、返ってきたっていうか。⑫こっちが彼女の想いを尊重するように変えたら向こうも変わった、みたいな良い循環が生まれた気がして。

第Ⅲ期の9月には、カナコの自立的な行為が見られたことから、カナコからユリカ保育者への見方が変わった〈⑤保育者見方転換実感〉や、カナコから新たな気づきを得た〈⑥本児新側面吸収実感〉を抱く。この際、【④過度な援助の自戒】を感じると同時に、これを機に、前勤務園の保育と比較した【③子どもの主体性や選択を尊重する園風土】に助勢されて〈②子ども主体の保育を問い直し〉をしたり、自身のせっかちな性格を自覚した【①保育者特性自覚化】に助勢されてカナコと歩み寄る速度を調整しながら、カナコの真意を通底的に感じ取る〈⑦本児真意推測〉をしたりするなど、本児の自己選択を尊重した関わりを改めて意識するようになった。

10月には、〔駆け引き的関わりか率直的関わりか〕の判断を余儀なくされる場面で、カナコ意思を受容しつつ妥協案を提示するなどの駆け引き的対応をした際に、〈⑧保育者反応試し〉や〈⑨手探り感〉などを感じつつ、〈⑩相互手探り感と信頼関係の兆し〉を実感するようになる。これを機に、【駆け引き払拭と手立て転換】に助勢されて、〈駆け引きなしの関係構築志向転換〉に至る。その後、11月の同様の場面では、先回の反省を生かした【協同的アプローチ】に助勢され、ユリカ保育者が駆け引きをせず率直的な関わりを展開したところ、カナコも素直に回答するようになる。この際、一瞬の葛藤から本児真意を感じ取ると同時に、互いへの信頼が循環し合っているような〈⑫相互感情円環実感〉を抱き、互いの感情が通底的に共有できている〈⑩相互感情通底共有実感〉に基づきながら、〈互いにわかり合える関係構築実感〉が生じていた。

4) 第Ⅳ期：後方支援期 (1-3月)

【事例7：大丈夫だから泣かないで (2/18)】

他児と遊んでいた際、ブロックがカナコの手首に当たり泣きだす。自分たちでどうやって解決するか見守っていた際、泣き続けるカナコに懸命に謝る他児が泣いてしまう。すると突然カナコが泣き止み、「大丈夫だよ」と他児に言うが、他児は泣き止まない。ユリカ保育者が仲立ちし、他児にカナコが大丈夫だと言っていることを伝え、気持ちを立て直すと「もう

痛くないよ」と言って再び遊び出す。

【2月期の語り（一部抜粋）】

今回は①「どこまで自分たちで解決していくかな」っていうのを、ちょっと見てみたかったというか、こっちの意図としては「子ども同士での関わりの広がりを見守りたい」、「子どもたちの解決する力を育てたい」という教育的意図も大切にしたいなっていうのが私の中にもあったから…。(略)でも、②信頼関係がないことは前提として考えていない。ただ、今まで入ってくれていたとかがあるから、今回は私に対しての戸惑いというか「助けてくれないの？」みたいなのはあったかなって。(略)でも、それでもいいんです。③次のステップに進むために、私がわかってもらえなくても、突き放されたって思われてもいいんです。④もう、「大人がいなくても、カナちゃんならいけるよ」っていう…。カナちゃんへの安心感というか、信頼感がありますね。

1月以降の第IV期になると、カナコ自身の言葉を介した意思疎通も明瞭になり、友達との関わりも広がってきたことから、ユリカ保育者はカナコの成長を見通した後方支援を心掛けるようになる。2月には、〈②信頼関係確立実感〉を抱きつつ、カナコなら大丈夫という【④本児への本質的信頼】や、保育者の思いをわかってもらうことよりも子ども同士で解決する力を育みたいという【①③自立への教育的意図】などに助勢され、見守りや必要に応じた一時的な介入に徹していた。最後の3月は、ユリカ保育者の幼児グループ異動やカナコの移行などに伴い、物理的距離が離れても心理的距離は変わらないなど、『互いにわかり合っている関係』に至った実感を抱いていた。

2. ヨリコ保育者がツヨシとわかり合おうとする関係構築プロセス

続いて、ヨリコ保育者がツヨシとわかり合おうとする関係構築プロセスは、全6期に大別された(図2)。

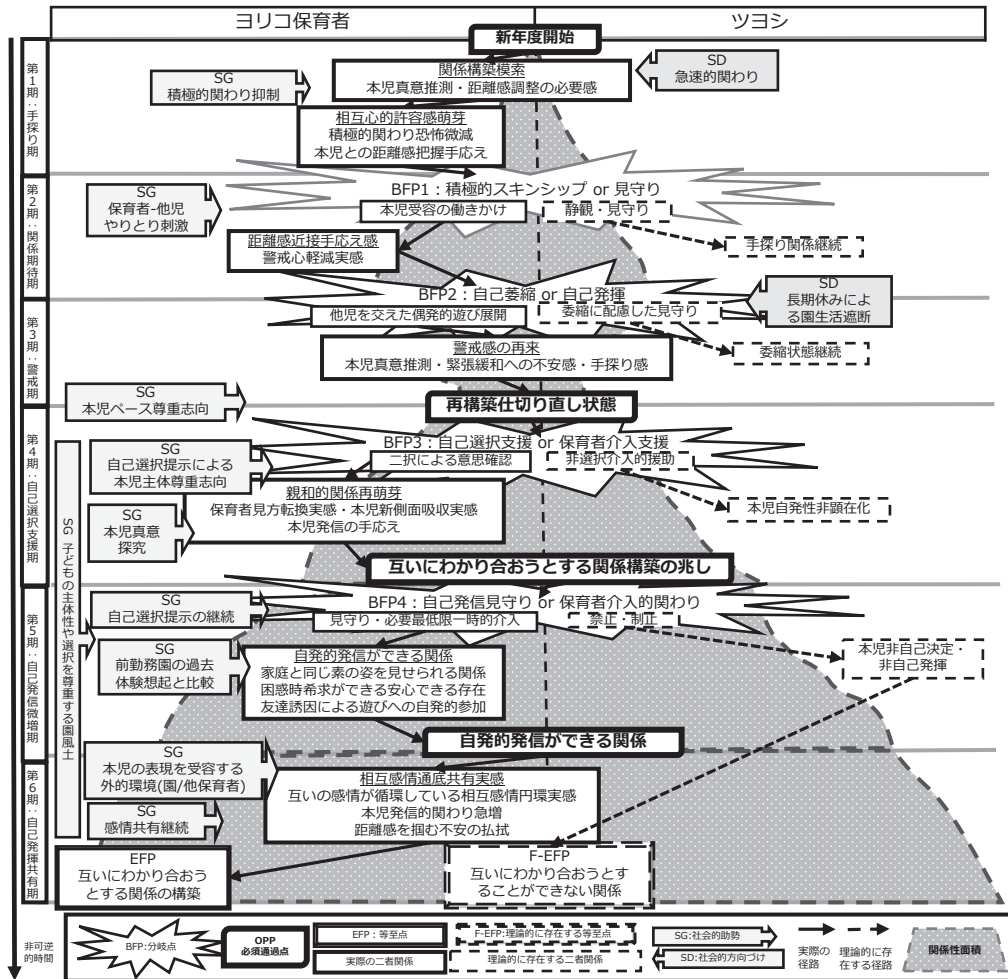


図2 ヨリコ保育者とツヨシの関係構築プロセスにおける Parallel-TEM 図

1) 第I期：手探り期 (4-6月)

【事例1 「やりたい遊び見つけた」(4/9)】

声をかけたり遊びに誘ったりしていたが、いつも警戒しているツヨシ。この日園庭で、ウッドチップをひたすら移動させて10分ほど遊んでいた様子を、少し離れたところから一歩引いて見守る。しかし、途中で視線が合うと、遊びを止めてしまう。

【4月期の語り (一部抜粋)】

私結構、①最初の段階で、声をかけすぎちゃったんです。動かないから、何考えているかと思って、「ツヨちゃん、これしてみようよ～」みたいな感じで散々やっちゃって。「何この人？何だろう？」みたいな感じで、すごい目で見ると。②「あ、違うな、このアプローチの仕方は」と思って、離れてみようと思って…。(略) ③距離感が大事なのかな…みたいな。④ツヨシくんからすると「これ以上は来ないで」みたいなものがあるのかなって思って。だから、

⑤ツヨシくんの思いを先に知ってから、どれくらいの距離が良いかを私も探っていこうと思って。ちょっと私も勢いよく行き過ぎたので、ちょっと引いてみて、ツヨシくんの好きな遊びからちょっとずつアプローチをしていけたらイイかなって。まずはどれくらいのパーソナルスペースかを図ってみたいとわからないかなと思って。

第Ⅰ期の4-6月は、新しい環境への不安や警戒心がツヨシに見られていたため、ヨリコ保育者が積極的に働き掛ける《①急速的関わり》をしたところ、余計に警戒する姿が見られた。ツヨシの真意を察する〈④本児真意推測〉に基づき、ツヨシとの関係を俯瞰的に捉えてペースを微調整する〈③⑤距離感調整の必要感〉を抱くと同時に、【②積極的関わり抑制】に助勢されながら、徐々に警戒心を和らげることに配慮しつつ、関係構築の手掛かりを模索していた。

6月になると、ヨリコ保育者からの些細な関わりの中で、ツヨシの笑顔が垣間見られた。積極的関わりに対する恐怖も僅かに軽減すると同時に、本児との距離感把握の手応えも感じるようになり、少しずつ心を許せる関係へと変化しつつある〔相互心的許容感萌芽〕を抱く。

2) 第Ⅱ期：関係期待期（7月）

【事例2：膝の上に（7/3）】

室内を機嫌よく歩き回っていたツヨシに、両手を広げて「ツヨちゃん」と呼び掛けると、笑顔で飛び込んできて私の膝の上に座り、ぎゅっと抱きしめる。その後、再び立ち上がって歩き出し、チラッと私を見る。両手を広げるまでは目をそらして歩き回るが、両手をバツと広げると、一目散に飛び込んで膝の上に座ることを繰り返す。

【7月期の語り（一部抜粋）】

まぐれじゃなく、呼んだから来てくれたわけでもなく、①手を広げたら来てくれるっていうのが、警戒心がちょっと取れたのかなって感じて嬉しかったですね。（略）わりとけっこう笑顔も増えて、友達との関わりも増えてきたので、この園やグループもちょっとずつツヨちゃんの中に定着して安心してきたかなって思うので、②今こそ距離を縮められるのかなって思って。（略）今回は③独りでニコニコしながら歩いていたので、向こうのアクションを見て「今なら安心していう状態だぞ」「今ならいける」と思ったので、自分の中で距離を詰めようと思っていたのもあるし、ぐっと思つたからですかね。

7月になると、ヨリコ保育者と周囲の他児が遊ぶ様子に刺激を受ける【保育者-他児やりとり刺激】の影響を受け、徐々に笑顔が増え、友達との関わりも増えてきた。そのような中で、ヨリコ保育者がツヨシの名前を呼んで両手を広げると満面の笑みで保育者の膝に座るなど、保育者発信の関わりに対して、喜んで応答するツヨシの姿が見られた。これまでの警戒心が減った〈①警戒心軽減実感〉を抱くと同時に、ツヨシとの今の関係性や距離感を見極めながら〔②③距離感近接手応え感〕を抱くようになる。

3) 第Ⅲ期：警戒期 (8月)

【事例3：風船遊び (8/27)】

お盆に1週間休んだツヨシは、お盆明けの登園後しばらくは、4月当初のように警戒する姿が見られた。この日風船を手渡すと、大事そうに抱え、空気が抜けて跳んでいく様子を見ながら、初めて笑顔になる。「飛んでいったね」と声をかけると、「飛んでいった」とようやく言葉を発する。

【8月期の語り (一部抜粋)】

本当に、①しばらくは、ほぼほぼ笑わない・動かない・何もしないっていうスタンスが続いて、戻るのにどれだけかかるかなと思って。やっぱりちょっと、②本当はもっと休みたいのっていう思いもまだ言えないし、行動として殻に閉じこもるじゃないですけど、ツヨちゃんの中で家に居たりお母さんといたりした時間が長かった分、そこが安心できる場所なのに「僕はなぜここに居るの？」っていう感じかなって思って。(略) 風船で遊んでいる時も、ずっと隅にいて。ちょっと近づいて、1回飛んでいくのを見てから、また隅に。私と目が合うと固まって戻るんです。③警戒心がまだ解けていないのかなって思って。(略) ちょっとこの1週間の休みで警戒が戻ってしまっていたので、④私の中でも探り探りな感じで、ツヨちゃんに「あ、笑った、今なら行ける？」っていう不安感と、「これで引かれたらどうしよう」っていう最初の頃のような「どこまでいける？」っていう手探りがあった。

8月の第Ⅲ期は、1週間のお盆休み明けの再登園時に、《長期休みによる園生活遮断》から、4月当初と同様に、再び激しく警戒するツヨシの姿が見られた。ヨリコ保育者と目が合うと固まる・遊びの場面ですぐに隅に行って固まるなどの様子から、ツヨシの立場に立って真意を感じ取る〈②本児真意推測〉を通して、〈④緊張緩和への不安感・手探り感〉を再度抱くと同時に、〈①再構築仕切り直し状態〉に至ったことを痛感する。偶発的な遊びから警戒心が和らぐ手応えを感じつつ、再び俯瞰的に本児との関係性を捉えながら、焦らずタイミングを見計らった関係再構築に努めるようになる。

4) 第Ⅳ期：自己選択支援期 (9-10月)

【事例4「ヨリちゃんとやる」(10/11)】

衣服の着脱を自分でやろうとするが、難しくなると手が止まり固まってしまうことが多かった。この日散歩に行く準備をしていたところ、靴下を何度も履こうと挑戦するが、上手く履けず戸惑っていた。自分でやろうとしていることを受け止め、あえて傍で見守っていたところ、ツヨシと目が合い「ヨリちゃんとやる！」と声をかけてくる。一緒に靴下を履き終わると、嬉しそうに笑顔で靴を履く。

【10月期の語り (一部抜粋)】

だんだん彼の中で、①困ったときには助けてくれる存在というか、表現していい相手、自分っていうのを出してもいい、思いを伝えてもいい相手って思ってくれるようになったのか

なつて。(略) じっと見て待っていたときは、「やってって言うかな」って思って待っていたんですけど、まさかの「ヨリちゃんとやる」だったから、「あっ、そうきたか！」っていう感じもあつて。彼の中でも、困った時に一緒にやろうというのが「ヨリちゃんとやる」だったから、②「ああ、そういう言葉の使い方もあるんだな」っていうのも、私の中では学びになつたし、ツヨちゃんから。(略) ③彼なりの思いが本当はあつたかもしれないなつて、私も思つて…。こっちがいつも選択肢を与えてしまうと、それしかなくなっちゃうので…。ずっと固定をしていっちゃうと、彼の幅が狭まっていくかなとも思うし。2択にしているのも、④「ツヨちゃんの中でどう受け取っているのかな」「本当はもっと違うことを思っているかもしれない」つて、その気持ちをちゃんと尊重したいっていうのもあつて…。

第Ⅲ期の警戒期を踏まえ、9月以降の第Ⅳ期において、ヨリコ保育者は【本児ペース尊重志向】に助勢されながら、ツヨシのペースや主体性を尊重し、タイミングを見計らいつつ関わっていった。9月には、オムツが上手く履けず手が止まってしまった場面で、「一緒にやる？自分でやる？」とヨリコ保育者が声をかけると「自分でやる」と答え、その後も上手く履けなかった際に再度尋ねると、「一緒にやる」と応答する姿も見られた。10月以降も、このような【④自己選択提示による本児主体尊重志向】に助勢されて自己選択できるような言葉がけを続けたり、ヨリコ保育者自身の推測以外にもツヨシなりの思いがあるのではないかという【③本児真意探索】に助勢されてあえて見守ったりしたところ、ツヨシが自ら意思を伝える姿が徐々に増え、素直に表現して良い相手として認知され始めた〈①保育者見方転換実感〉や、「そういう言葉の伝え方もあるんだ」とツヨシから新たな学びを得た〈②本児新側面吸収実感〉を抱く。これを機に、〈親和的關係再萌芽〉を感じると同時に、〈互いにわかり合おうとする關係構築の兆し〉を感じ始める。

5) 第Ⅴ期：自己発信微増期 (11-1月)

【事例5：乗っちゃおう (11/15)】

室内遊びで机の上に身体を載せてバランスをとって遊んでいたため、傍で見守っていると私と目が合い、ニコッと笑う。そのまま机の上に乗り始め、母親が迎えに来た時に見せるツヨシの活発な姿が初めて見られた。「おいしそうなツヨシくんがいる～。食べちゃおうかな～」と遊びながら声をかけると、机から降りてニコッと笑いかける。

【11月期の語り (一部抜粋)】

なんか、お母さんがお迎えに来ると、この姿はよくあつたんです、今までも。①それが出たのが嬉しくて。机の上に乗ることは良いことではないですけど、お母さんの前で見せるツヨちゃんと私たちの前で見せるツヨちゃんが、ちょっと近づいてきたっていうのが嬉しくて。(略)「降りてね」とか「乗っちゃダメ」とか言うよりも、楽しく降りられたらいいなつていうのがあつて、私の中でも。その「はい、降りて降りて」みたいに言うと、ツヨちゃんがやらされた感じになっちゃうのもちょっと嫌だなつて思つて。(略) ②今まで前の園とかだつ

たら、私、普通に「降りて」「机の上に乗っちゃダメ」って言ってきたんです、過去には。でも、それだと伝わらなくて、何度も乗るんですよ。変わらないんです。乳児が多かったんですけど、「机は乗っちゃダメ」って言っても乳児にはわからなくて。で、何でだろうって思っていて。③この園に来たときに、そうやって「ダメだよ」「危ないよ」って言って否定することで、子どもは否定されても「じゃあ、どうしたらいいの？」ってなる。その感覚がわからないから、次の行動を伝えてあげる。そこに乗っちゃダメなのは、危ないからだけど、乗っちゃダメなら「次にじゃあこうしてみたら」っていう先を見せてあげることで、子どもは行動することができるっていうことを、この園で学んできて。それを取り入れて、やったことが多分こうやってつながっているの。

第Ⅴ期の11月以降も【自己選択提示の継続】をし続けたところ、さらにツヨシからの自己発信が増え、家庭と同じような表情や姿をヨリコ保育者へ見せることが多くなったことから、〈①家庭と同じ素の姿を見せられる関係〉になった実感を抱く。また、【②前勤務園の過去体験想起と比較】から禁止・制止では子どもは変わらないという実践知や、【③子どもの主体性を尊重する園風土】など自園に潜在する風土や方針の影響を受けながら、必要最低限の一時的介入を意識しながら関わり続けたところ、12月以降には、困惑時には自ら助けを求めたり、友達から刺激を受けながら自発的に遊びに参加して自己発揮したりすることが増え、見守りを通じて〈自発的発信ができる関係〉へと変化しつつあることを実感する。

6) 第Ⅵ期：自己発揮共有期 (2-3月)

【事例6：アピール (2/22)】

おやつ前の片づけ時に、他児がたくさんのおもちゃを片付けていたため「ありがとう」と声をかけると、ツヨシが目の前にやってきてニヤッと笑い、片付け始める。「ツヨシくんも片付けてくれてありがとう」と声をかけると、ニヤッと笑って離れ、再び近くにきてニヤッと笑って離れることを繰り返す。その後、笑ったまま顔を隠して、「バァ」といえないないばあを笑顔で始め、私とのやりとりを楽しむ。

【2月期の語り (一部抜粋)】

多分、①日々の関わり合いのツヨシくんなかで、この園自体もそうだし、今のグループやコーナーや保育者もそうだし、そういうのに安心感を覚えてきたことと、表現をしたことを受け止めてくれる存在と思ってくれたところもあるのかなと。あと、今までツヨシくんに対して、こっちから結構行くことは多かったけれども、②何かをするたびに一緒に共有したり、共感したりとか受け止めたりとかしてきたことが、ツヨシくん自らの表現につながったのかなと。(略) 今回は、③ツヨシくん自身から関わりを持ってきてくれて、一緒にその楽しさを共有したいという気持ちが伝わってきたことが大きかったのと、私自身は「あっ、ツヨシくんから来てくれるんだ」という、ちょっと安心感もあって。④たぶん、今まで何かやりとりをしていても、またいつか離れていくんじゃないかという不安を、抱えていたのか

など。気持ち的に、こっちからアクションをしないといけないかな。でも、ちょっと引いてみたら、来てくれたけど、でもまた離れていくなってしまうような、距離感を縮めていくペースに不安があったけど、この不安感が、今回自分の中でなくなったという感じがして。⑤お互いの気持ちがワッと近づいたようなペースが一緒のような感じがして、今まで距離感を掴むのにフワフワしていたのが、全部パーツと考えなくていいんだってところまでなって。

最後の第VI期には、ツヨシからヨリコ保育者や友達へ発信する〈③本児発信的関わり〉が増え、ヨリコ保育者自身も〈④距離感を掴む不安の払拭〉が実感するようになった。この背景には、【子どもの主体性を尊重する園風土】に根差した【①本児の表現を受容できる外的環境】や、ヨリコ保育者自身がツヨシと感情を共有・共感・受容するなどの【②感情共有継続】が大きく影響していた。自然体の素の姿が垣間見られるツヨシから、ヨリコ保育者は互いが歩み寄るペースが合致してきた〈⑤相互感情円環実感〉を抱く。その後も、安心感・受容感に包まれながらツヨシが以前より自己発揮している姿から、互いの感情が通底的に共有できている〈相互感情通底共有実感〉を抱くと同時に、『互いにわかり合おうとする関係構築』を実感するに至っていた。

IV. 総合考察

以上の結果から、2名の中堅後期の保育者が子どもとわかり合おうとする関係構築プロセスを Parallel-TEM で分析したところ、面積の推移に着目すると、全期を通じて保育者と子どもの双方が対称的に互いの面積を縮小・拡大しながら推移する様相が示され、1年を通じて徐々に拡がりを帯びながら構築されていたことが明らかになった。その上で、子どもとわかり合おうとする関係を構築していく中で、以下の3つの特徴が見出された。

1. 子どもとわかり合おうとする際の本児視点や俯瞰的視点

まず初めに、子どもとわかり合おうとする際に、本児の立場に立った本児視点に依拠しながら、保育者自身と子どもの関係性を捉えようとしていたことが見出された。例えば、〈本児真意推測（ユリカ保育者：第Ⅲ期、ヨリコ保育者：第Ⅰ期・第Ⅲ期）〉のように、本児の立場から真意を推測しながら現時点の関係性を捉えようとしていた。また、本児から私への見方が変わった〈保育者見方転換実感（ユリカ保育者：第Ⅲ期、ヨリコ保育者：第Ⅳ期）〉や、本児から新たな学びを得た〈本児新側面吸収実感（ユリカ保育者：第Ⅲ期、ヨリコ保育者：第Ⅳ期）〉など、本児側の立場に保育者が身を置き換え「本児が、私へ、どのようなまなざしを向けているか」を感じ取るような本児側の感情に焦点化しながら、関係性を捉えようとしていた。前稿（上村，2020b⁽¹⁴⁾）において、中堅前期の保育者（6-10年目）は、徐々に本児側に保育者自らが入り込んで本児の立場から保育者はどのように映っているかを感じ取る「本児心情への着目」へ転換しつつあることが見出されている。この知見を踏まえると、保育者が経験年数を積み重ねることで、徐々に本児の立場に入り込んで捉える視点を獲得していくと推測される。

加えて、上記の本児視点だけでなく、双方の歩み寄る速度や互いの感情の循環度など、保育者自身と子どもの関係性を俯瞰的視点から捉えていることも見出された。具体的には、ユリカ保育者の第Ⅱ期において、新担当者としての急速的関わりを回避して前保育者との良好関係を優先したり、ヨリコ保育者の第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ期において、本児と歩み寄るペースや速度に配慮したりしていた。また、互いの気持ちを通じ合うだけでなく、互いの心情が好循環を生み出す、双方が心的距離を縮めるペースや速度が一致するなどの〈相互感情円環実感（ユリカ保育者：第Ⅲ期、ヨリコ保育者：第Ⅵ期）〉や、互いの心情が通底し共有できる関係にある〈相互感情通底共有実感（ユリカ保育者：第Ⅲ期、ヨリコ保育者：第Ⅵ期）〉など、保育者自身と子どもの関係性を空中から衛星で眺めるように俯瞰的に捉えながら、互いの心理的距離を把握するだけでなく、歩み寄る速度や循環の程度に配慮して調整しようとしていた。

このように、本児視点から子どもの内面世界を慮る、俯瞰的視点から二者間の狭間にある感覚的な速度を意識して調和を図ることは、中堅前期の保育者には一部散見されたものの（上村，2019b⁽¹⁵⁾）、初任・若手期の保育者には見られなかった特徴である。よって、保育者のキャリア発達に伴い、徐々に子どもを捉える視点や自身と子どもの関係性を捉える視点などが多角的に拡がり、包括的に捉えながらわかり合おうとしていることが示唆された。

2. 本児主体尊重志向に裏付けられた保育行為に基づく関係構築の促進

次に、本児の主体を尊重しようとする「本児主体尊重志向」に裏付けられた多様な保育行為によって、関係構築が促進されることが明らかになった。具体的には、ユリカ保育者の第Ⅱ期における【保育者選択承認志向】や〈見守り〉、第Ⅱ・Ⅲ期の本児と一緒に取り組もうとする〈協同的アプローチ〉、第Ⅴ期の【本児への本質的信頼】など、保育者の意図を優先させるのではなく、本児の主体性や真意を尊重しながら関わろうと駆使していた。また、ヨリコ保育者の第Ⅳ・Ⅴ期における〈自己選択提示〉や、第Ⅴ期の〈自己発信見守り〉など、本児に選択肢を提示する・待つ・見守るなどの保育行為によって、自己決定・自己判断を支えていた。

これらの保育行為を通じて本児の自己発揮が見られたり、保育者自身が本児とわかり合えた実感を抱いたりしていたことから、このような本児主体尊重志向に基づく保育行為は、子どもとわかり合おうとする関係構築を促進させる大きな誘因であると考えられる。前稿（上村，2020b⁽¹⁶⁾）の中堅前期の保育者においても、見守るという行為は、経験年数の蓄積に応じて巧みに使用する頻度が高くなる傾向があることや、子どもの自発的な意思表示や保育者への関わりを誘発させて関係構築が促進する転機になりうることなどが見出されているが、中堅後期の保育者においても上記知見を支持する結果となった。加えて、見守るという保育行為以外にも、自己選択提示や協同的アプローチなど本児の主体性を尊重する志向性に裏付けられた保育行為は、子どもとわかり合おうとすることを促進する重要な関わりになりうると言えるだろう。

3. 保育者の実践知に影響を及ぼす転職というキャリアの転機

最後に、本研究の中堅後期の保育者は、「転職」というキャリアの転機を保育者自身の現在

の実践知を反映させていることが明らかになった。この2名の保育者に関しては、先述の本児主体尊重志向に基づく保育行為を選択していた背景として、『以前だったら、きっと「口を出しすぎないで待とう」なんていう発想はなかった（ユリカ保育者：第Ⅲ期）』、『前の園では、普通に「降りて」「机の上に乗っちゃダメ」って言ってきた（ヨリコ保育者：第Ⅴ期）』など、「以前であれば保育者主導の関わりをしていた」という意味の語りが得られた。これは、転職を経験したからこそ、比較対象となる前園での過去体験を想起し、現在の園における自分の保育と対比した上で、ようやく自ら気づいて語られる言葉であると言える。

この背景には、両者共に多くの期で通底して占めていた、現在の園における【子どもの主体性を尊重する園風土】が、潜在的に保育者の意識を支えていると推測される。しかし、最初からこのような園に就職していた場合には、もしかしたらこの園風土を「本園の方針だから」と当然の如く受け止めたり、ある意味で無自覚的であったりした可能性も否めない。10年以上のキャリアを積むと、転職を経験している保育者もいれば未経験の保育者もいると考えられるが、このような転職という機会を経ることによって、比較対象となる園が存在したり、過去と現在の自分を客観的に対比・検証したりすることができるため、現在の本児主体尊重志向に基づく保育者の信念をより鮮明に自覚化することにつながると考えられる。

4. まとめと今後の課題

以上を踏まえ、中堅後期の保育者は、本児視点だけでなく俯瞰的視点も駆使した上で、二者間の狭間にある感覚的な速度の調和・互いの感情の循環度なども感じ取りながら、子どもとわかり合おうとする関係を構築していることが示唆された。同時に、ただ単に多角的な視点から本児や保育者一本児の関係性を包括的に捉えるだけでなく、子どもの自立や自己発揮を目指しながら、本児主体尊重志向に裏付けられた保育行為を意図的に選択することが関係構築を促進させていたこと、またその背景には、転職を通じて体得した保育者の実践知や信念が大きく影響を及ぼしていたことが明らかになった。

一方、本結果は中堅後期の保育者2名の事例に焦点を当てた一考察であるため、園文化や転職の有無などが異なる他の中堅後期の保育者には、異なる様相が示される可能性もあることに言及しておく。特に、第1章で述べた通り、中堅後期の保育者は自身のライフステージや保育者としてのキャリアの積み方も一様ではないことが推測されるため、今後は多様な中堅後期の保育者の関係構築プロセスを比較しながら検討を重ねる必要がある。また、これまでの研究結果の蓄積から、どのキャリアの保育者においても、わかり合おうとする関係構築プロセスの中で、子どもと徐々に“わかり合えてきた予感”を抱き始めた関係構築の兆しを感じた段階と、“わかり合えた実感”が予感ではなく確信に変わった段階の2つの潮目があることも見出されてきたため、関係構築途上のこれらの時期こそが、互いの関係性の中で保育者の子ども理解を最も深化させると推測される。これらの“わかり合い”を捉える際の着眼点や判断根拠が、保育者のキャリア発達に応じてどのように異なるかについても、更に解明していく必要があると考える。

引用文献

- (1) 鯨岡峻 (2011) 子どもは育てられて育つ 関係発達の世代間循環を考える. 慶應義塾大学出版会, 296-315.
- (2) 上村晶 (2019a) 保育者と子どもの関係構築プロセスの変容と要因 (1) —初任期の保育者に着目して—. 桜花学園大学保育学部研究紀要, 20, 19-39.
- (3) 上村晶 (2020a) 保育者と子どもの関係構築プロセスの変容と要因 (2) —若手期の保育者に着目して—. 桜花学園大学保育学部研究紀要, 21, 19-42.
- (4) 上村晶 (2020b) 保育者と子どもの関係構築プロセスの変容と要因 (3) —中堅前期の保育者に着目して—. 桜花学園大学保育学部研究紀要, 22, 1-14.
- (5) 高濱裕子 (2001) 保育者としての成長プロセス—幼児との関係を視点とした長期的・短期的発達—. 風間書房, 35-71.
- (6) 志賀智江 (2001) 幼児理解促進のための教師教育に関する研究. 風間書房, 150-156, 171-190.
- (7) 佐藤有香・相良順子 (2017) 保育者の経験年数による「幼児理解」の視点の違い. 日本家政学会誌, 68(3), 103-112.
- (8) 吉田満穂・片山美香・高橋敏之・西山修 (2015) 保育経験年数から見た気づき体験の特徴. 岡山大学教師教育開発センター紀要, 5, 9-18.
- (9) 杉村伸一郎・朴信永・若林紀乃 (2007) 保育者省察尺度に関する探索的研究 (1) —保育現場における反省的实践—. 幼年教育研究年報, 29, 5-12.
- (10) 三谷大紀 (2007) 保育の場における保育者の育ち—保育者の専門性は「共感的知性」によってつくられる—. (佐伯胖 (編), 共感—育ち合う保育のなかで—), ミネルヴァ書房, 113-115.
- (11) 伊賀光屋 (2009) 地平を融合させる対話としてのテーマ分析法. 新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編, 2(1), 15-38.
- (12) サトウタツヤ (2015) TEA というアプローチ. (安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編), TEA 理論編), 新曜社, 4-28.
- (13) 上村晶 (2018) 保育者と子どもの関係構築プロセスを可視化する試み. 桜花学園大学保育学部研究紀要, 17, 13-30.
- (14) 前掲(4)
- (15) 上村晶 (2019b) 「年度途中のクラス担当者変更」は保育者と子どもの関係構築プロセスにどのような影響をもたらすのか—保育者の葛藤の諸相に着目して—. 保育学研究, 57(3), 32-43.
- (16) 前掲(4)

謝辞

本調査の実施に際し、1年間を通じてご協力いただきましたユリカ保育者・ヨリコ保育者や、カナコさん・ツヨシくんと各保護者様、A法人の理事長先生、及びB園・C園の園長・職員のみなさまへ、厚く御礼申し上げます。また、貴重なご助言やParallel-TEMの構想において多様な視点をご教示くださいました名古屋市立大学 上田敏丈先生、立命館大学 サトウタツヤ先生を始め、TEA研究会の先生方に心より感謝申し上げます。

付記

本稿の研究成果の一部は、日本保育学会第73回大会 (2020年5月) における発表内容を含んで

いる。また、本研究は日本学術振興会科学研究費補助金による研究助成（17K04650）を受けて実施した一部である。

（受理日 2021年1月7日）